

橋本 富太郎 提出 学位申請論文（課程博士）

『近代日本における神道と道徳―廣池千九郎を事例として―』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は、廣池千九郎という人物による神道の研究および信仰を事例として、近代日本における神道と道徳との関連を考察したものである。法制史家の廣池が『古事類苑』編纂従事から神宮皇學館における神道教育を経て、教派神道の研究と信仰を経験した後に、道徳科学を体系化していく過程を検討している。

緒論「神道における廣池千九郎」では、はじめに神道における廣池の業績を概観し、それが戦後どのように位置づけられているかを、神道関係の基礎文献から確認し、現代の研究において埋没している点を指摘した。例えば廣池の著書は、加藤玄智編『明治・大正・昭和神道書籍目録』では六部門に、十七部の書籍が挙

げられており、それ以外にも神道に関係する優れた業績を有するが、人名辞典には誤認も多く、『神道人物研究文献目録』にも重要な研究書の見落としがある。こうした課題に対する研究の意義を挙げ、論文全体の構成を概観している。

第一章「『道徳』における廣池千九郎の位置」では、さまざまな分野に足跡を残した廣池が最終的には新しい道徳論を提唱し、それに基づく学校を造って教育に尽力したことに鑑みて、当時から現在に至るまで、「道徳」の世界でいかに評されてきたのかを、その後継者も含めて検討した。廣池は教員の経験をはじめ、自然科学と漢学の素養を用いて自ら開拓した東洋法制史の研究手法や、『古事類苑』編纂で培った該博な知識、および神道の研究と信仰を総合して道徳科学（モラロジー）を提唱し、戦前において国民一般の忠孝観念とも合致し、多くの支持者を得て講習会等も好評を博していた。しかし戦後になると、国民全体に道徳に対する忌避感が支配的となり、教育学および道徳教育の分野では一定の評価を得つつも、一般的に廣池は疎外される存在となり、研究対象として取上げられるこ

とも少なくなっていた。

第二章「研究史上の廣池千九郎」では、こうした状況にあつて研究史を辿り、内容の分類を試みている。廣池研究は、これまで相当の蓄積が為されてきているが、研究史が顧みられることが殆どなかった。そこで本論文では、神道以外の分野も含めて研究史に多くの紙面を割き、その充実を明らかにし、課題の抽出を重視している。殊に神道に少なからぬ貢献をしたにも関わらず、それが十分に理解されなかった原因には、これまで神道関連の著作や事跡などが個別的に検討されることはあつても、神道全般と廣池の人生とを通史的にとらえた研究が存在しなかったことが指摘できる。よつて本論文では、神道関係の分野から研究と事跡から広く採り、更に他の軸足を「道德」に据えることによつて、廣池の業績を検証するとともに、神道と道德との関係を論じている。

第三章「神宮皇學館における廣池神道学の形成」では、『古事類苑』編纂から神宮皇學館における「神道講義」の開講までの「神道」概念の変遷を跡づけてい

る。現在の意味における「神道」は、『古事類苑』では「神祇部」にあたり、「神道」は全百巻の内の二巻を構成し、内容的には今でいう「神道神学」「神道思想史」の意味に近い。廣池はその「神道」の編纂を担当し、綱文の段階からすべて起稿している。当時は廣池自身も「神道」にはそれほど関心を示しておらず、その道徳的意味に関しては全くといっていいほど価値を置いていなかった。『古事類苑』編纂事業が終わると、神宮皇學館教授に就任し、翌年から「神道」講義を担当することになった。神宮皇學館には、それまで「神道」と題する授業が存在せず、廣池のそれは、ここでの最初期にあたるものであった。最初に開かれた卒業生対象の「神道講義」では、「神道」を「祖先教」であると唱え、敬神や忠君愛国を説く倫理・道徳の教えであることを強調していた。

第四章「『伊勢神宮』の刊行」では、『伊勢神宮』の刊行に焦点を当てた。神宮に関して近代的手法による最初の研究書となった本書は、廣池における思想形成史においても、神道研究史においても重要な存在である。神宮の概要を述べると

ともに、井上頼圀に託された研究課題の「皇室における万世一系の原因究明」に対する回答でもあった。その原因は、天祖天照大神の御聖徳と歴代天皇の御聖徳、つまり「道徳性」であったという。廣池は本書において、天照大神の御聖徳が広大無辺であるかを述べ、それを歴代的な天皇が忠実に継承していることを歴史的に実証しようとした。また、日本と中国の国体に関する比較研究を行い、中国における最高の崇拜対象は「天」であるが、日本のそれは祖先の天照大神であることを述べた。また神宮式年遷宮にあたっては、遷御当日の各学校における講話に本書が広く用いられ、その神宮論が教育界に広く普及し、翌年には修身教科書に収められ、教育内容が浸透する土壌を用意したといえよう。

第五章「神道信仰と道徳」では、神宮皇學館における研究・教育活動にもどり、廣池が神道研究を教派神道にまで範囲を広げ、神道の宗教的側面を高く位置づけるとともに、自身が深い信仰を得て神道の新境地を開くまでを跡づけている。教派神道は固有神道の宗教的側面を現代に展開するものと考え、これを前述

の祖先崇拜的な神道観によって日本神話の神々と結びつけることにより、信仰と忠君愛国とが貫徹する独自の神道論を展開した。さらに、肺病の経験および天理教幹部の就任と離脱を経て、天照大神の神徳に対する解釈を深め、「慈悲寛大・自己反省」という言葉に高めて、道德論における徳目の最上位に置いた。なお当時、教派神道に対する一般社会の印象は良好ではなく、学者が正面から研究対象とすることはなかった。ところが廣池は、「神道史」を教える上で現代の神道、つまりは教派神道も研究すべきと考えて、本格的な研究を手掛けていった。そのため神宮皇學館期における教派神道の、先駆的研究が成し遂げられたと云えよう。

終章「道德科学における神道」では、まず論文全体のまとめを行い、次に廣池の主著『道德科学の論文』の中で神道がどのように展開しているかを考察した。本書に説く道德科学では、一般的な道德とは別の高い次元に「最高道德」を置き、そこには四大聖人に連なる系統とともに、神道的徳目に基づく皇室の伝統が掲げられている。この系統には、これまでの神道研究と信仰の成果がそのまま盛

り込まれ、外国の主要宗教を包括した四つの道德系統と並列させることにより、神道的な価値を世界に普遍化・相対化した。また、祖先崇拜や尊王愛国という神道思想を、「恩」の概念によって道德として体系化されている。これらは、グローバル化の時代を迎えた我国の道德を再構築する上で、有益な示唆を与えることになるとする。

#### 論文審査の結果の要旨

第一章の「『道德』における廣池千九郎の位置」では、戦後も長い間、否定ないし無関心の荒波に曝されてきたが、近年では「道德」を中心とする廣池の業績が再評価されつつある。天皇および神道の再検討によって、次世代をめざす新たな視野にたった「道德」の確立することが、現代の我々に課せられた課題である。

第二章の「研究史上の廣池千九郎」では、道德科学研究所における生誕百年記念事業で、廣池の道德論が広く顕彰されている。そこにおいて廣池の学問が再検討され、世界的な四大聖人の高度な道德を「最高道德」と称して、大正十五年に『道德科学の研究』を完成させ、道德科学研究所を設立した経緯が、具体的に明らかにされてきた。さらに著述を第一期の歴史学、第二期の『古事類苑』編纂から法理学・神道学まで、第三期では道德科学と大別して、内容的にも深い研究が進められている。特に神道に関しては西川順土、皇室に関しては所功などの業績が注目できる。さらに廣池という人物と学問を研究する上では、論者が新たな解析をみせており、最も適切な立場にあると云うことができよう。

第三章の「神宮皇學館における廣池神道学の形成」では、中国古代の祖先が「天」を崇拜するのに対して、我が国では祖先崇拜の道德論へと煮詰められている。敬神・忠君・愛国の道德面、さらには祖先教という位置づけがなされた。従来「神道」とは教派神道に近い用語であり、当時の科目名は「神祇史」であった



が、実質的には「神道」の内容を持っていた。換言すれば「神祇史」は「形式の変遷を記述せるもの」に対して、「神道」とは「神祇の実質を講明する学」と対比している。神宮皇學館で「神道」を正課にしたのは大正十五年のことであり、従来、同館で「神道」は講義されておらず、最初にそれを講義した意味は大きいものがある。飽くまでも「神道は祖先教」であり、神道非宗教観と一線を画するのは当然として、キリスト教などの普遍宗教に通じると見做し、やがて教派神道へと傾斜してゆく萌芽が生じていたと評せられよう。

第四章の「『伊勢神宮』の刊行」では、この著作の刊行が伊勢でも一部非難があり、特に阪本広太郎の批評は論理的で手厳しいものがあつた。増訂版では天照大神の歴史性と連続性を強調して、国体論と結びついた祖先崇拜の道德教に、より近づく立場を取ったことは見落とせない。天照大神の神教と天皇の聖徳を中心として、祖先崇拜の道德教を目指すのが当時の廣池の立場であつた。我が国は天照大神に直結する特殊性をもち、皇室における「敬神と尊祖」に着目して、順徳

天皇や花園天皇の「神事第一」、同時に仁徳天皇や明治天皇の「慈悲と反省」を重視した。このように廣池の研究が、神宮・国体・教育から「神道」の意義を考えて、真正の教育界に齎した意味、広く国民信仰に及ぼした意義は大きい。願うならば、神宮や皇室の祭祀上からも、天照大神の信仰的な意味づけを、より深く展開してほしかった。

第五章の「神道信仰と道徳」では、神宮皇學館における「神道」の講義内容を改めて取上げ、神宮を介して「神道」の宗教性へと次第に変化してゆく。遂には神宮を中心とした国体論に発展すると同時に、宗教的な信念に満ちた「神道者」として飛躍するに至った。明治中頃の帝国憲法の発布から日露戦勝に繋がる後期、さらに大正時代にかけて、世界の一流国家に仲間入りを遂げたとの自覚から、教育勅語や戊辰詔書をめぐって、国体や国民道徳を要望する論議が盛上りを見せていた。廣池の明確な指摘はないにしても、当然ながらその論議を背後として、深甚な影響を受けていたと指摘できるが、それらとの関連を考察しなかった

のは残念なことである。

終章の「道德科学における神道」では、死線を乗り越えた廣池が、天照大神の慈悲寛大・自己反省を『道德科学の論文』に組み込み、天照大神をはじめキリスト・ソクラテス・釈迦・孔子という、独自の四大聖人に繋がる普遍的な最高道德として、社会的に説いてゆく。しかも皇室の道德性と国民がうけた恩恵を説き、天照大神から歴代天皇へと一貫する伝統を重視するにいたる。殊に万世一系・道德系統・国家伝統と、その奉恩・感謝の気持ちが必要されていたが、そうした精神の軌跡を丹念に辿ることが大切である。具体的には天理教の教学と廣池の四大聖人論とが合致せず、やむなく離教するに至った事情が明らかとなれば、成果がより大きかったと考えられる。

グローバルという表現を用いるならば、四大聖人のグローバルと、全体的な国家伝統と個人的な慈悲寛大というローカルとを、どう関連させ構成するかが課題となる。国際交流や国際貢献という世界的な課題に向けて、廣池と天理教とが

同じ視点に立てず、遂に棄教せざるを得なかったが、その分岐点が奈辺にあったのか、「神道」の将来を考える上からも、改めて問い迫ることが大切である。

以上の通り、研究と実践に努めた廣池を事例として、多くの新資料を活用しながら、具体的に研究・立証した成果は、相当に評価することができよう。今後とも神道と道徳の究明に向けて、努力されることを深く期待したい。

よって本論文の提出者橋本富太郎は、博士（神道学）の学位が授与せられる資格があると認められる。

平成二十七年二月十四日

主査 國學院大學教授 中西正幸 ①

副査 國學院大學教授 武田秀章 ①

副査 京都産業大学名誉教授 所 功 ①

橋本 富太郎 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十六年十二月十七日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	中西正幸	⑩
副査	國學院大學教授	武田秀章	⑩
副査	京都産業大学名誉教授	功	⑩